「そんなら姐貴、現在我子が死んでも俺を思ふてくれるか」
「八さん必ず見捨ておくんなはるなや、さあ氣嫌をなほして一杯飲んどくなはれ」
兩人が差向ひで一杯飲んで居ると表の戸を（トン〳〵トン〳〵）
「ヘイ今晩は、一寸お開け、今晩は……」
「姐貴、誰や來てるで」
「一寸待つとくなはれや、何誰……」
「片町の儀助でおます、一寸お開け」
「ヘイ只今開けます……八さん死んだ宅の人の弟が來たんや、すまんが暫く熱いやろけど押入へ這入てとくなはれ……今開けます」
（ガラ〳〵〳〵）
「ヘイ姐貴今晩は、甚い御無沙汰仕てます。兄貴の居る時分はチョイ〳〵寄せて貰ひましたが、兄貴が死んでから見向もせんと、さぞ薄情な奴やと思ふてなはるやろうが、私も僅の資本で商賣を仕ましたが失敗を仕て、手に覺へた事もなし漁が好きで片町で網打を渡世に仕て居ます。今日も上で降つた雨で水が殖たを幸に天滿橋の下で網を打つとどつしりかゝつたので上げて見ると女の死體、溫みが有るので水を吐して見ると此家のおくしや、様子を聞いて見るとこれ〳〵やと云ふで、そんな馬鹿な事

をと、先刻來て近所で聞いて見るとおくしの云ふのと同じ事。近頃姐貴甚いお樂みが出來たそうな、兄貴の生て居る時分には蝶よ花よで育て上げたおくしが彼様な事になつたら世間へもすむまいと思ふ。其様に博勞とか馬方とかゞ可愛か、姐貴」
「ハア、可愛うて可愛うてならん」
「イヤ、現在の實の我子よりも」
「ハア可愛いのうて、馬子ぢやもの」

二代目林家菊丸のこと

吉野狐、猿廻し不動坊、後家馬子を作つた林家菊丸師は晩年盲目となつた不幸な人であつた。その作る所の落語はことゞく裏長屋の生活を寫したものであつた。吉野狐しかり、猿廻ししかり、本號の後家馬子又しかりで皆裏長屋に起つた事件を描いて實に巧妙で極めてゐる。從前大阪の端々にはこんな裏長屋が至るところに在つた。殊にこの後家馬子の長屋の女房共の會話はその儘玉造邊の長屋裏の日常生活であつたと云へよう。

長屋の風俗、義理人情は上方獨自の境地であつて、そこに目をつけて描き出した菊丸師の諸作が後世に殘り喜ばれるのも偶然ではない。本篇にある五錢とか二十錢とかの金は明治二十年頃のそれである。

この菊丸師は又落語角力の行司が巧かつたと云はれてゐる。雀は一匹でなく一羽だと穴を拾はれて「でも千代萩の文句に雀が三匹とまつてといふてあります」といつたのはこの菊丸師である。